

## 2016年度 入学式 式辞

学長 待田 昌二

学長の待田です。皆さんご入学おめでとうございます。神戸松蔭女子学院大学の教職員を代表して、心よりお祝い申し上げます。ご列席いただいたご家族、関係者の皆様にも感謝申し上げます。

本学の入学式は、すでにおわかりのようにキリスト教の礼拝形式で行っています。キリスト教系の中学や高校出身の方には特に珍しいものではないでしょうが、違和感や戸惑いをおぼえる人もあるかもしれません。本学の歴史は、今から124年前にイギリス人宣教師が設立した松蔭女学校にさかのぼり、キリスト教伝道を目的としてスタートしました。今も我々は、入学式や卒業式といった行事を礼拝形式で行っていますし、キリスト教について学ぶ授業もあります。

しかし、当然ですがキリスト教の信仰を強制するものではありません。キリスト教の形式に慣れない人は、外国の文化を体験するような、これまでは接していなかった文化の体験として新鮮な気持ちで経験してもらえればと思います。これからしばらくの間、神戸松蔭という文化の中で過ごすことになったわけですから、入学式だけでなく、クリスマス行事をはじめとする学内行事や礼拝を体験してみてください。

そして、みなさん自身が信仰を持たない場合でも、そういった体験を通して、人はなぜ宗教への信仰を持つのか、なぜ祈るのかについては考えてみてください。今現在の日本では薄れつつあるとはいえ、キリスト教に限らず、長い歴史の中で信仰や祈りは人々にとって欠かせぬものでしたし、世界的にみれば、多くの人にとって今現在でも欠かせぬものです。なぜ祈るのか、信仰を持つのかについて考えることは、人間について考えることにもつながります。

さて、皆さんはこれから大学で教育を受けるわけですが、昔と違って今の教育では、叱るよりも褒めることが大事とよく言われます。心理学の研究から、罰を与えるよりも褒美、報酬を与える方がよく学ぶということがわかっています。しかもその報酬は、お金よりも、褒め言葉の方が効果的であるという研究さえあります。そこで、私も皆さんを褒めたいと思います。

皆さんはすごい、立派です。自信を持ってください。

とはいえ、何を褒めたのかわからないままでは、自信の持ちようもないでしょう。褒めた理由を説明します。

皆さんはフライングダイナソーに乗りましたか？USJの新しいアトラクション、ジェットコースターですが、地面と水平の姿勢で乗りこむので、フライングダイナソー、すなわち空を飛ぶ恐竜につかまれて、飛んでいるような感覚を味わえることが人気の理由の一つだそうです。空飛ぶ恐竜は、翼もった恐竜ということで、翼竜と呼ばれます。USJのフライングダイナソーは、今から8千万年前くらいに棲んでいた代表的な翼竜の一種プテラノドンにつかまれて飛ぶという設定になっています。普

通ならとても味わえない体験ですが、プテラノドン自身のように自分の力で自由に空を飛べればつかまれて飛ぶよりはなお素晴らしいでしょう。

実はプテラノドンは、映画のジュラシックパークや USJ のコマーシャルのように素早く方向転換できたのか疑わしいようですし、人間をつかんで持ち上げるほどの筋力はなかったという説もあるようです。プテラノドンよりも、今現在生きている、身近にいるハトやスズメの方が空を自由に飛ぶ能力は優れているそうです。自由に空を飛べることは人間の夢とも言えますから、うらやましい限りです。しかし、スズメに対して、自由に空が飛べてすごい、素晴らしいと褒めても、そんなあたり前のことをなぜ褒めると不思議に思うだけでしょう。もしスズメが人間並みの知能を持っていて話をする事ができれば、人間が手を使って様々なことをしているのをとても便利でうらやましいと言うでしょう。何しろスズメは、我々が手を使ってしていることを、くちばしでしないといけないわけですから。

私たちは、両手を使ってダンボール箱のような大きなものを運べるだけでなく、二本の指で米粒ほどの小さいものをつまむことができます。それだけでもスズメからみればうらやましい限りですが、私たちは手と指を使ってもっと複雑なことをしています。例えば、皆さんは今朝自分で服を着て、ボタンを留めて身なりを整えてきたでしょう。しかし、自分で服を着てボタンを留めることのできるロボットはまだ作られていません。作る必要がないので作られていないだけでなく、作ろうと思ってもとても難しいからです。

筋肉には単純というイメージがありますが、実際には指を曲げたり伸ばしたりという単純な動作のために筋肉を収縮するだけでも、顕微鏡レベルで見ればとても精密なメカニズムによって実現しています。さらに私たちは服のボタンを、目をつぶっていても留めることができます。指先の感覚から、脳がボタンとボタン穴の位置を判断して5本の指をどのように動かすか決めていているからです。しかも、一度決めた動作を実行するだけでなく、ボタンとボタン穴の位置をその都度判断して、指の動きを少しずつ調整してうまくボタンを留めることができます。脳や神経が筋肉を動かす仕組みは、最先端のコンピュータにも劣らない複雑さです。もし私たちが、自分自身の脳が情報処理している過程を実感できたら、自分自身の能力のすばらしさに気絶するほど感動すると思います。皆さんは他の動物もできないし、現在の最先端のテクノロジーをもってしてもできないことができるわけですから、とても立派で、素晴らしいと言えます。

とはいえ、やはり、手や指を使って自分で服を着ることが、例えスズメやペッパーができないのにあなたはできると言って褒められても、うれしい人は少ないでしょう。それはなぜでしょうか？一つにはもちろん、できる人が身近にたくさんいるからです。服を着ることも、着物の着付けを自分でできるという人がこの中にいれば、今どきの人にしては珍しい、すごいと褒められますし、褒められた人も少し自慢でしょう。でも江戸時代に行ったら、着物の着付けはできてあたり前で、洋服を着る

ことができる方がとても貴重です。私たちが江戸時代に行くことはできませんが、外国に行って折り紙を折る、例えばツルを折れば結構感心して褒めてもらえます。日本に戻ればツルを折れる人の方が多いくらいですから、それだけで褒めてくれることはありません。それがわかっている、外国に行って褒められればうれしいものです。見方を変えれば、普段あたり前にしていることでもやはりすごいことです。皆さんも自分を褒めてください。

しかし、そう言われればそうだけど、素直にうれしいという気にならない、という人も多いでしょう。うれしくない理由の二つ目は、特に苦労もなく自然に身についた能力は、自分の力である、という感覚が薄いためです。私たちは、何の苦も無く新しい能力を身につけられればよいのと思ってしまいます。しかし実際は、何も考えずに、何の努力もせずに自然にできることには、できたという達成感を持ってませんし、できるという実感も持ってません。簡単すぎるゲームは面白くないのと同じです。

もちろん、努力をしてもなかなかできないということもあります。努力の仕方が間違っていれば、それこそ無駄な努力ということになります。それでは、続けるのが嫌になってしまいます。やはり、どんなことをすればよいのか、今している努力が間違っていないのか誰かから学ぶ方がよいでしょう。そこが我々教員の役割です。すなわち、どんな努力をすればできるようになるのか、努力の仕方を教えるのが、教員の役割です。

やや回りくどい話をしました。大学での学びは、高校よりも難しいことを学ぶというだけではありません。むしろ大事なのは、普段あたり前と見過ごしていることを、見方を変えて新たな視点から考えるということです。自分自身についても、思い込みにとらわれず、新たな視点で考えてみてください。あまり実感できていなくても、皆さんは、素晴らしい能力を持っています。ですから、とりあえず、自分は結構えらい、立派だと褒めましょう。そして、自信を持ってください。自信がなくなったら、目をつぶって服のボタンを留めてみて、自分の能力を確認してください。

それに加えて、大学生活の4年間で、少し苦労して、できればかなり苦労して、新しくできることを増やしてください。そうすれば、心の底から自分自身を褒めることができます。